

# お金のためだけに、絆のなかで働くこと

奥谷京子

WWBジャパン代表

被災者の経済的自立を促すには、アイデアが必要だ。商品の購入予約の形で代金を先に集め、仕事を創る。こうして生産者と消費者の絆を育みながら、

震災の復興支援に取り組むWWBジャパンの活動を紹介する。

## 3・11で女性起業家のネットワークが動く

東日本大震災が起きた日、わたしは東京の事務所にいた。震源地を知って思い浮かんだのが、ここ数年來のお付き合いがあった岩手県九戸郡洋野町の庭静子さん。ウニやホヤなどを使ったレストランを経営していた。船や車ともにお店も津波に流され、地獄絵巻のようだった、と電話で知った。急いで仲間と直接救援のトラックを出して、燃料などを提供した。

がれき撤去に疲れた彼女が嘆いたのは、自分のことよりも従業員の将来だった。「何もしないで毎日過ごすことがいかに辛い。働く場があれば移住する必要もない」。そこでわたしはすぐに「いつでも送ってね便（庭さんの商品の購入予約）」を全国に呼びかけた。わずか五日で二〇〇万円（一口五万円）が集まり、そのお金で庭さんは加工場を再建した。数年かけて五万円の商品を作って送り続ける。そうすれば販路も確保され、仕事ができるのだ。こ

れには全国の女性起業家も協力して下さっており、「顔が見える応援がなかった。商品はいつまでも待つ」とエールをくれた。お金以上に、それが庭さんの励みになる。

## ソーシャルネットワークプロジェクト始動！

WWBジャパンは、女性の経済的な自立を支援する団体 Women's World Banking の日本支部として一九九〇年に発足した。経済活動を始める際に誰もが直面する法・資金・教育面での問題解決を目指して起業セミナーを開催し、一〇〇〇人余の起業家を輩出してきた。震災の復興支援でも、これまで築いたネットワークを活用し、「いざというとき役に立つ」活動を心がけている。

庭さんの購入予約がひと段落し、次に設備投資にお金をかけずに、避難所や仮設住宅など場所を選ばずに女性たちの能力を引き出すことが何かできないかを考え始めた。そこで思い出したのは、

## 誇りに思える仕事を創る

震災から一年経った昨年、だんだんと震災の話題もニュースで取り上げられなくなり、事業としてどう継続するかが課題となった。まず宮古を訪れて自分たちのオリジナル商品を創り、自らが全国へ赴いて被災の経験を語りながら販売することを提案した。このような提案をすると、多くの場合地方の人たちは拒むのだが、宮古の女性たちは違う。何をやるにも前向きだ。「皆さんにこれだけお世話になったのだから自立しよう！」と意見がまとまった。これまでに東京以外にも金沢、京都、兵庫の西宮を訪問し、今後も九州へと生の声を届けに行く予定だ。この行動力で大手企業からの商品づくりの依頼を受けたり、さらに彼女らの商品はフランスにも飛んだ。仲間で作事を受注・分配できるようにと事業協同組合設立の準備も始まっている。

手仕事はその人を不思議なくらい夢中にさせ、完成したときに喜びを与えてくれる。購入者からの感謝の気持ちがさらにやる気をおこさせる。こうした循環のなかで、絆が働く意欲を支えていく。頭を使って手を動かす、これこそ働くことの本来の意味ではないだろうか。自分が前向きに生きるために働くのだと彼女たちはわたしに教えてくれる。経済が不安定ななか、組織にぶら下がらず、自分で手を動かして稼ぐ力をもっている人はたくましい。被災地で一人ひとりが喜びをもって自立しようとする仕組みは、依存型になってしまった日本を再生する先駆けモデルになるとわたしは確信している。

幼いころに目にした、編み物をしている祖母の姿だ。毛糸を大事にして、何度も編み解きながら新しいものに作り変える。編み物は究極のリサイクルであり、材料さえあればいつでもでも始められる。さらにわたしたちのセミナーを卒業したニットデザイナー三園麻絵さんの協力もえることができた。編み物を通じた仕事・生きがい創り、「ソーシャルネットワークプロジェクト」の始まりである。

二〇一一年六月、これから暑くなるという時期に、全国に毛糸の提供を呼びかけた。わたしたちの姉妹団体、日本のフェアトレードの先駆者「第3世界ショップ」には全国に取引先のお店が六〇〇店以上ある。これらのお店がさらにお客様にも声をかけて、たくさん毛糸や道具を提供して下さった。それらの糸で配色・デザインなどをWWBジャパンとデザイナーが準備し、福島のお津若松市、岩手の宮古市、岩泉町、大槌町、青森県青森市（福島から避難している人びと）の約六〇〇人の編み手へ提供した。材料の毛糸は無料で集まり、今でも提供したいという全国からの善意の連絡が絶えない。また商品を買う人を募集したところ一五〇人以上から一口三万円の申込があった。それが仕事創りになり、それぞれの地域で、編み物サークルができた。これまでまったく知らなかった人同士も、年齢に関係なく、何でも話し合える仲間になる。仮設住宅では遠慮がちでもここでは編み棒を片手におしゃべりし、いつも笑いが絶えない。さらに岩手で編み方をマスターした人たちが青森に赴いて教えるなど、編み手同士で技術を高め合う関係へと発展している。



宮古のオリジナル販売商品



2011年6月下旬、会津若松で初めて編み物講習会を開催



2011年7月半ば、岩手県宮古市の避難所を訪問



2010年3月、震災前の庭さんのお店



津波で流された庭さんのレストラン